

**令和5年度文京区アカデミー推進協議会
第1回分科会(国内・国際交流分野)概要記録**

日 時	令和5年7月28日(金) 18:30～19:45
会 場	文京シビックセンター17階 1701会議室
出 席 委 員	座長 山田 徹雄 内藤 雅義、山田 健一、近藤 裕子、塩澤 雅代
欠 席 委 員	-
事 務 局	高橋アカデミー推進部長 堀越アカデミー推進部観光・都市交流担当課長 瀬戸井アカデミー推進課都市交流担当主査
資 料	次第、令和5年度第1回アカデミー推進協議会(以下「協議会」という。) 資料第2-1号、資料第2-2号
(議事) 1 議題 ◎委員意見 ◆事務局説明	<p>1. 令和4年度の事業実施状況の点検・評価について</p> <p><u>①分野別基本方針 国内交流自治体との交流促進と相互発展について</u> 協議会資料第2-1号に基づき、同事業を通じた達成状況について説明。</p> <p>◎国内交流自治体食材購入費補助について、津和野町の食材にも、この補助事業を通じて、区内飲食店の購入実績があり、大変有効性の高い事業だと感じている。ただ、コロナ渦で飲食店も減ったと思われるが、これからウィズコロナの状況の中で、今までと今後の目標設定について聞きたい。</p> <p>◆食材補助事業の今後の目標設定について、確かに令和5年度は今までの参加店舗数から減少している。減少の要因は複数考えられるが、地方や交流自治体を知るきっかけとして良い事業であり、今後も区民へ魅力を発信できる場を設けていくため、事業内容の精査が必要となる。引き続き、区内店舗に各交流自治体の食材PRだけに留まらず、観光PRも含めて行っていきたい。また、補助がある時は交流自治体から食材を購入するが、その後の継続的な購入に繋がらない懸案もある。直接取り寄せた場合、送料などコスト面の課題もあるが、交流自治体の食材の味を知ってもらい、多少コストをかけても、その食材を気に入ってもらい、さらに交流の機会へと繋げたいと考えている。今後も本事業のPRに努める。</p> <p>◎区内大学の学生も区の協定都市の物産展等に参加していると聞き、協定都市の店舗や物産など、広く紹介することが大事だと感じた。</p> <p>◎国内交流について、大学のイベントや学会・総会などもあるが、キャンパスが広大な大学はキャンパス内で会場を賄えるが、狭小で会場が限られる大学もある。大学のイベントなどは海外からの参加者も多いため、区内の施設を会場として使った際には、施設を通して区の良さを紹介できるのではないかと。</p>

◆イベント等については、現在も協賛実施の場合がある。また、文京シビックセンターには大ホール等の各種施設があるので、今後の協力方法を検討していきたい。

◆大学との連携については、アカデミー推進係の担当で、学長懇談会を年に1回、担当者会議を年に2回実施しており、区からの情報提供や、各大学からの質問等を受けて話し合っている。今後、大学連携単独での事業実施は難しいが、29ある大学と、交流フェスタなどと結びつけた取組の可能性を検討していく。

◎交流フェスタについて、国際交流と国内交流とで戦略を変えている点、また合同で行っている内容について教えてほしい。

◆交流フェスタは、今まで区内在住の外国人に向け、日本文化の体験を目的に国際交流フェスタとして長く実施してきた。これからは、区内在住在学の外国人と区民との接点を増やすことを目指し、今までの形に捉われず、国内交流自治体の物産展などを通し、来場した区民と参加した外国人との交流の場となるよう実施する。そのため、今回から名称を「都市交流フェスタ」とし、外国人と区民の交流と融合を図っていく。

②分野別基本方針 国際理解を育み定着に向けた機会づくりについて
協議会資料第2-1号に基づき、同事業を通じた達成状況について説明。

◎ホームステイ生徒交換事業について、現在カイザースラウテルン市と実施しているが、今後、同様に友好都市のイスタンブール市ベイオウル区や北京市通州区と実施の予定はあるか。

◆カイザースラウテルン市に比べ、ほかは区と協定を結んでから日が浅く、イスタンブール市ベイオウル区も協定10周年を迎えていない。今後、自治体間での交流を深めた上で、ホームステイやその他交流の機会を設け、住民間の交流を進めていきたい。

◎当団体では、高校の交流プログラム事業で、トルコのイスタンブール市から区に50人の生徒を迎えたが、今後は同事業を実施した場合、区に相談の上、生徒のホームステイや、区民と触れ合える機会を作れるといいと思う。

◆今年でトルコ建国100周年、翌年は日本とトルコの国交樹立100周年、さらに翌年は区とイスタンブール市ベイオウル区の友好都市提携10周年と続くので、区でもトルコの写真展や、自治体間だけでなく国同士の交流など、周年に合わせて盛り上げていきたい。また、トルコの生徒のホームステイも、相談があれば、区もできる範囲で協力したい。

◎ホームステイ生徒交換事業について、交流都市だけでなく、区内大学が提携して

いる海外大学との留学生事業に区が参入して、そのネットワークを活用し、本事業を拡げてもいいのではないかと。

◆現在、姉妹都市協定には、明確な基準は無く、今後どの都市と交流するか検討をしているが、交流を長続きさせるには、歴史的・文化的な繋がりを大切にしたいと考えている。区民のニーズに合致した上で、交流できる都市を今後も検討していきたい。

◎ホームステイ生徒交換事業の交流について、コロナ禍もあり、オンラインでの実施も見受けられるが、コロナ終息後の交流のあり方としてハイブリット型の検討等、今後の計画についてお聞きしたい。

◆ハイブリット型の交流について、オンラインと対面での交流では、それぞれメリットとデメリットがある。オンラインのメリットは、計画してすぐに実施できる点だが、海外だと時差の関係で、簡単に調整できない現実がある。また、初対面の子どもたち同士のオンライン交流は難しいので、実際に対面での交流後オンライン交流へと繋げる方が有効的と考えている。また、一度繋がれば、区を介さず子どもたち同士で、LINE等で繋がるケースもあり、そうした交流を目指している。そのため、今後も場面やタイミング、環境を見極めた上で、ハイブリット型の交流を進めていきたい。

◎カイザースラウテルン市には、区との縁で日本庭園がある。区には、茗荷谷駅近くにカイザースラウテルン広場がある。

◆区では、姉妹都市カイザースラウテルン市の紹介チラシ(席上配付)を作成して、区との交流や、カイザースラウテルン広場などを紹介している。

◎ハイブリッド型の交流について、昨今の円安等で渡航費が高騰しており、対面での交流がしたくてもできない。しかし、オンライン交流についても、日本と海外の学生とでは、オンラインの使い方に差があるので、その場合には工夫が必要だと思う。

◆区の生徒とカイザースラウテルン市の生徒が10人程度でオンライン交流する機会があったが、言語の壁でなく日本の生徒はシャイでなかなか発言できなかったため、オンライン交流前に事前学習会を開き、その時の英語講師にもオンライン交流会に参加してもらい、MCを務めることで、生徒たちが自主的に発言し、活発に交流することができた。こうした工夫により、今後もオンラインを活用していきたい。

◎オンライン交流は、参加する生徒の個性で様々なので、間に入るファシリテーターが大事だと思う。

③分野別基本方針 外国人が活躍できる環境づくりについて

協議会資料第2-1号に基づき、同事業を通じた達成状況について説明。

◎やさしい日本語教室は、留学生から大変人気で、特に学校へ通うだけでは日本人と触れ合う機会が非常に少ないので、そうした機会として大変貴重である。また、区には文化財や立派な庭園があり、大学も沢山あってアカデミックな街で、非常に特殊なエリアなので、区内に通う留学生等がそれらを知らずに卒業するのはもったいない。ホーチミンから来た小学生たちが、区の街並みや公園などを見て、綺麗で整然としていと感動していたので、もっと区と留学生や海外の生徒の触れ合う機会があると良い。そうすれば、将来、また本区に行きたいと思ってもらえるのではないかな。

◎やさしい日本語を活用した留学生との交流会について、オンラインでの交流は難しいと感じる。そうした中で、事業実施に向けた工夫をお聞きしたい。また、参加人数の目標が5年間で変わっていないが何故なのか教えていただきたい。

◆やさしい日本語教室は今まで年1回開催だったが、年2回に増やした。年1回の交流では、その次に繋がらないので、同じメンバーで2回実施することで、交流会以降も学生同士の交流が続くことを目指している。

◆観光分野の分科会で紹介したが、区内在住在勤の留学生が参加し、区の魅力、例えば観光地、或いはその近くにある飲食店等、日本の文化を友人知人にSNS等で発信してもらおう、また区でチラシを作成し、海外の観光団体等に発信してもらおう事業を実施している。今後も区の魅力に触れる機会の1つとしてもらえるよう実施していく。

◆文京区は小さいが、東京ドームなどのエンターテインメントに、谷根千のような下町風情も残し、日本庭園などもある、面白い地域だと思っているので、海外の観光客には、地方などに行く時間が無くても、半日あれば区内で様々な日本文化を体験できる点をPRしていきたい。

◎コロナで学生生活も大きく変わり、留学生が大学内で日本の学生と触れ合う機会も激減してしまった。そこで、留学生に対し、例えば森鷗外記念館の紹介と併せ、鷗外がドイツに留学していた、出生地は津和野町など、区内の博物館などやゆかりのある地、文豪などの紹介やPRをすることで、留学生が日本を旅行する際に選んでくれるのではないかな。

◆文豪などの文化人をフックにしたPRについては、昨年が鷗外没後100年で、津和野町や北九州市と連携して様々な事業を実施した。今後も、関係する自治体と共同でPRする機会を捉えていきたい。

◎国際理解促進事業について、留学生にもっと日本文化を知ってほしいし、区民に外国の文化を知ってほしい。ホームステイとなると大掛かりなのでホームビジットなどを取り入れ、1泊2日や半日など、区内の家庭に学びに行くような取組があると、少し

	<p>の時間でお互いの理解が深まるのではないか。また、ホームビジットの後も、留学生と区民とで関係が続くと理想的だと思う。</p> <p>◆区としても、区民と外国人との交流の機会を模索しており、やさしい日本語教室の回数を増やし、交流フェスタの形を変更するなど、事業を展開しているところである。今回の意見は、今後どのような事業に展開できるかも含め、検討していきたい。</p>
2 閉会	